



2年ぶりのオンサイト学会

先日、分子生物学会年会@パシフィコ横浜に参加した。2019年の年会以来、2年ぶりのオンサイトの学会だった。まず、ポスター会場に足を運んだ。分子生物学会年会の風物詩ともいえる膨大な数のポスター、企業ブース、ポスターの前の人ばかり、コロナ禍前は当たり前だった光景が想像以上に懐かしく、会場でひとりにやけてしまった。学会の楽しみのひとつは会場での偶然の出会いだ。学生時代は学会の最大の目的は発表を聞くことだったが、年を重ねるにつれて知り合いが増え、会場での偶然の出会いが学会の最大の楽しみとなっている。久しぶりに会う知り合いとの何気ない会話が共同研究につながることもある。これはZoom会議にはないオンサイトのよさだ。今回の学会では、年会長の塩見美喜子先生の後押しもあり、初めてワークショップを企画させていただくことになった。やる前は面倒に感じていたのだが、事前準備、当日の進行ともに年会事務局の尽力のおかげでまったく面倒なことはなく、オーガナイザーとしてワークショップの名前から演者の選定、時間配分まで好きなように決められるのはとても面白かった。ワークショップの名前は、膨大な要旨集のなかで目を引き興味をもってもらえるようなものがないだろうと思い、「構造生物学の新展開——見えないモノを見ようとして電子顕微鏡を覗き込んだ」にした。Twitterには「すべっている」との意見も散見されたが、このワークショップ名を見て興味をもち会場に来たという学生もおり、うれしかった。演者には、クライオ電子顕微鏡を用いて実際に

実験している若手研究者を選んだ（平均年齢約30歳とおそらく全ワークショップで一番若いワークショップだったのではないと思う）。構造生物学は、クライオ電子顕微鏡単粒子解析の技術革新、また、高精度構造予測プログラム AlphaFold2 (AF2) の登場により、大きな転換期を迎えている。最近是他分野の研究者からもこれらに関して質問されることも多い。そこで、演者にはAF2に関するトピックを発表に盛り込んでほしいと伝えておいた。前日の懇親会で伝えたにもかかわらず、演者の方々は、AF2予測構造と実際に決定した電顕構造との違い、AF2予測構造から示唆された構造変化など、AF2の利用に関する興味深い話題を盛り込んでくれた。構造生物学のワークショップは各論的な構造の記述に終始した、専門外の研究者にとって（構造生物学者にとっても？）難解で退屈なものとなりがちだが、今回のワークショップは専門外の研究者にとっても興味深いものになったのではと感じている。また、当日の会場に閑古鳥が鳴いていたらどうしよう、という不安もあったが、会場は満員で、Zoomでの視聴者も100人以上と大盛況だった。一度やってみるとオーガナイザーは予想以上にやりがいがあり楽しいものだったので、今後もワークショップを開催していきたいと考えている。2年ぶりにオンサイト学会に参加して、その重要性を再認識した。サイエンスには、研究室にこもって研究し論文を発表するだけでなく、他の研究者と実際に会ってコミュニケーションすることが重要だ。特に、学生にとって学会は外部とのコミュニケーションを通じて自分の研究を見つめ直したり、国内外の有名研究者と話したりできる重要な機会だ。実際、オンサイト学会の楽しさを経験していたら進路が変わっていた学生もいるように思える。日本の感染状況は落ち着いているが、海外学会のオンサイトでの開催はまだ先になりそうである。一刻も早い日常の復活を望んでいる。

(H.N.)